散策路を歩きまちの再発見
下流編

庄内川水辺の散策路

完成した水辺の散策路

平成２６年３月、清須市庄内川水防センター（みずとぴぁ庄内）から下流に向かう水際の散策路が完成しました。区間はみずとぴぁ庄内から新大正橋下流の大治町庄内川河川敷公園までの間約３．５ｋｍです。これにより、みずとぴぁ庄内を起点に上下流の散策路がつながり、より一層流域間の交流の促進が期待されます。下流の散策路も上流の散策路同様、まちの魅力が満載です。それらを探しに散策路を歩いてみませんか。

庄内川の賑わいを体験しよう

散策路の起点となるみずとぴぁ庄内では、年間を通して様々な催しが行われ、賑わいを創出しています。「尾張西枇杷島まつり」が開催される６月第１土曜日には、庄内川河川敷にて打上花火が行われ、大勢の観客が夜空に輝く大輪の花に酔いしれます。毎月第３日曜日には、かつて庄内川に架かる枇杷島橋のたもとで日本三大市場として発展した市場の賑わいの復活をめざし「みずとぴぁ庄内朝市」が開催されています。採りたて新鮮な野菜や流域の産品などが店頭に並び、多くのリピーターが訪れます。また最近では、市民の皆さんによる新たな催しも育っており、庄内川の賑わいはますます高まっています。皆さん、ぜひ庄内川の賑わいを体験しに来てください。

河川敷で行われる打上花火

庄内川の景観を楽しもう

清須市下河原地区の庄内川河川敷には農地が広がっています。大都市名古屋に隣接しながらこれだけのどかな風景に出会える場所はなかなか無く、都会の中の貴重な緑地として大切な役割を果たしています。これら農地の大半はもともと大正時代には桑畑でしたが、昭和に入り野菜畑に姿を変えていきました。その頃は、川の氾濫で水がついても比較的強い大根・ごぼう・里芋といった根菜類がつくられていました。しかし時代の変化に伴い、冬はホウレン草、夏はナスやキュウリなどが作られるようになりました。これらの作物は、水がかぶることに耐えられないため、最も氾濫の危険性がある台風シーズン前に収穫を済ませ、シーズン後に種をまくなどの工夫がなされてきました。

近年は農家の減少と高齢化に伴い、軽くて手間がかからない軽量野菜がつくられるようになりました。中でも台風シーズンまでに採り入れが済むシソづくりが普及し、農家全体に広がりました。初夏には赤紫色の絨毯を敷き詰めたような河川敷の風景が出現し、人々の目を楽しませてくれます。しかし農家の減少に伴い、この風景も徐々に姿を消す傾向にあります。「美しい愛知づくり景観資源」の一つにも数えられている貴重な風景を守っていく手立てを今後考えていく必要があるようです。

河川敷に広がる赤ジソ畑

庄内川界隈の歴史に触れよう

庄内川には、かつて成願寺、名塚、枇杷島の三つの大きな河原があり、散策路が通るこのあたりは枇杷島河原が広がっていました。枇杷島河原は枇杷島橋から下流中村区稲葉地までを言います。茶せん髷に、腰へいろいろなものをぶら下げた吉法師時代の信長は、近在の子ども達とこの河原でよく遊びました。その中に中村の稚児集団があり、日吉丸（後の秀吉）もその集団の中にいました。彼らは川狩などをして魚をとり、枇杷島や清須、津島まで売りに行ったと言われています。信長公記にも「信長は１５、１６歳の頃まで朝夕に馬術の訓練をし、川で水連した。河原では家来たちに竹槍で仕合をさせていた。」と書かれており、その河原が枇杷島河原であり、日吉丸のほかにも犬千代（後の前田利家）も稚児集団の１人であったようです。また、松平竹千代（後の家康）が織田家の人質として、２年間尾張で生活しており、当時、朝夕庄内川で泳ぎ、河原で遊んでいた信長は、きっと孤独な竹千代を誘い、一緒になって枇杷島河原で遊んだに違いありません。桶狭間の戦いの後、信長と家康は「清須同盟」を結び、終生守られてきたのは、もしかすると幼少時代に遊んだ信長と家康の絆の深さがそうさせたのかもしれません。歴史の想像は実に奥深く、庄内川と戦国武将のつながりは浪漫に溢れています。

かつて枇杷島河原があった界隈

みずとぴぁ庄内から下流に向かい散策路を歩いていくと豊公橋が見えてきます。このあたりは庄内川と隣り合って新川が流れています。所々で屈曲している自然河川の庄内川に対し、人工河川である新川はほぼ直線で河口へとつながっています。

江戸時代、名古屋の城下町はたびたび洪水の被害を受けました。これは庄内川に中小河川が一気に流れ込んでいたためで、これらの中小河川の水が庄内川に集まりすぎるのを防ぐために開削されたのが新川です。当時の尾張藩勘定奉行である水野千之右衛門は藩主徳川宗睦に、建白書を提出し具体的な方法と予算を示し、治水工事を嘆願しました。しかし当時藩の財政が窮乏しており、藩主は工事の実行にいったんは反対しました。しかし安永８年（１７７９年）の庄内川の大洪水に伴い、名古屋に浸水被害が起きると宗睦は工事を決断し、藩主近侍の人見弥右衛門と水野千之右衛門にその担当を命じました。そして総工費４０万両以上を費やし、工事は天明７年（１７８７年）に竣工しました。

かつてはきれいだった新川も高度成長期には工業廃水や生活廃水が流れるようになり、一時は相当汚染されていました。しかし、最近では下水道の整備や合併浄化槽の普及により、汚染も少しずつ減って、上流には鮎も戻ってきています。昭和３０年代までは、新川商工会と新川通り発展会共催による鵜飼も行われ、川の両岸や橋の上は見物客で埋め尽くされ、初夏の一夜を楽しんだと言われています。

庄内川の西側に沿って流れる新川

散策路界隈にはまだまだ知らない歴史・文化などが多く存在します。皆さんも散策路を歩き、まちを再発見してみてはいかがでしょうか。新しいことが見えると、まちのことがもっともっと好きになるはずです。